

リ
セ
ツ
ト
5
・
5

▼ジーン

ルーナの長兄。
リュシオンの腹心。

リヒルーチェ公爵夫妻

▲ミリエル ▲アイヴァン

ルーナの両親。
子どもたちになっぶりの愛情を注ぐ。

◀リュシオン(19歳)

クレスニアの王太子。
強大な魔力を持つ魔法使い。

▲ユアン

ルーナの次兄。
魔法の才能がある。

▲カイン(18歳)

ルーナに助けられ、
公爵家に身を寄せていた、
エアデルト国の第二王子。
現在は自国で勉強中。

▲フレイル(17歳)

レングランド学院に通う
精霊使いの少年。
他人にはその力を秘密に
している。

◀ヒューイ

エストランザ伯爵家の当主。
薬草学の研究の傍ら、
レングランド学院の
非常勤講師を務める。

▲アマリー

ルーナの姉。勝気だが、
心優しい美少女。
もうすぐレングランド学院の
卒業を控えている。

▲ルーナ(11歳)

ちきよが転生した姿。
リヒルーチェ公爵令嬢。
前世の記憶と強大な魔力を
持ちつつ人生やり直し中。

▲千幸(享年18歳)

超不幸体質の女子高生。

目次

恋するアマリ

7

リセット5・5

131

恋するアマリー

1 アマリーと教師

とある日の午後、レングランド学院にて――

「でね、ルーナったら早くも白魔法は上級講座ですって！　すごいでしょ!!」
「そうだね」

大きな執務机と本棚、そして簡素な木製テーブルが置かれただけの殺風景な部屋で、男――ヒューイ・ジル・エストランザは、はしゃいだ声をあげる少女に対し、気のない返事を口にした。
「もう、ちゃんと聞いてます?」

そう言って、不満そうに唇を尖らせた彼女――アマリーこと、アマリーシエ・フラウ・リヒトルーチェは、山のように積まれた書類に囲まれているヒューイに近づいた。

「うん、聞いているよ」

答えながらも、ヒューイが書類から目を離すことはない。だが、返事がもらえただけで満足したのか、アマリーは嬉々として話を続ける。

「それでね、昨日はエレイナとルーナと、そのお友達のコーデリアの四人で、放課後にお茶会を開いたの」

「なるほど」

「その時に、わたしとエレイナはもうすぐ卒業っていう話をしていたんだけど、ルーナったら『せっかく、姉様と一緒にの学院生活が送れてうれしかったのに、もうおしまいなんだね』なんて、しょんぼりしてしまったの。もう、本当に可愛いんだから!」

「確かにね」

何度目かの気のない返事。話に夢中になっていたアマリーも、ようやくそれに気がついた。

「ちよっと、ヒューイ先生ったら!　なによその適当な返事は!」

アマリーの抗議の声を聞いて、ヒューイははじめて書類から顔を上げた。

「え?　どうかしたのかい?」

その言葉で、アマリーは先程までの彼の相槌がいかに適当なものだったかを再確認し、ガクリと項垂れる。彼女は恨みがましく、じとっとヒューイを睨みつけるが、当の本人は不思議そうに首を傾げるだけだ。

「はあ……」

アマリーは諦めて大きなため息をつくど、ヒューイの執務机から離れ、テーブルへ戻る。

そして椅子に腰を下ろすと、何事もなかったかのように書類へ視線を戻すヒューイを、ぼんやりと眺めた。

無造作に伸びてあちこちにはねている、亜麻色の柔らかそうな髪。その長い前髪から覗く眼鏡の奥には、若葉色の綺麗な瞳。

(ほんと、研究一筋なんだから……)

心の中でばやきながら、アマリーはヒューイの背後にある窓へと目を向けた。そこからは、秋らしく黄色や茶色に色づく木々が見えている。

次第に感傷的な気分になりながら、彼女は目を細めた。
(あと少しか……)

アマリーは二ヶ月ほど後に卒業式を控えていた。

レングランド学院へ入学出来る最低年齢は十歳。その歳で入学した者は、基本的に成人となる十八の年に卒業を迎える。

十歳で入学し、四月ですでに十八歳となったアマリーは、この十二月に晴れて学院を卒業する。そして、新年に行われる王宮の夜会で、社交界デビューすることになっていた。

貴族の娘として生まれた以上、いずれそうなるのは決まっていたこと。アマリーもそれ自体に不満はないが、社交の場が花嫁探し、あるいは花婿探しの側面を持つことを憂鬱ゆううつに思っていた。

(卒業したら、学院で身につけた知識を生かしたいって思ってはいるけど、まだはつきりと何をすればいいのかわからないのよね。まあ、社交界デビューはしても、普通の貴族令嬢みたいに両親が勝手に結婚相手を決める——なんてことにはならないだろうから、それだけは良いけど。でも、出来ればその前に……)

「アマリーさん」

ぼんやりと考え事に耽ふけっていたアマリーは、名前を呼ばれてハッと我に返った。

「な、なんですか、先生」

彼女が焦りつつも返事をすると、ヒューイは不思議そうにアマリーを見つめ、おもむろに書類を差し出してきた。

「え？」

意図をはかりかね、アマリーはきょとんと彼を見返す。

「悪いけど、帰るならこの書類を本棟の研究所事務室に届けてくれないかな？」

ヒューイはそう言った後、差し出した手はそのままに、視線を机の上の書類へと戻した。

人に頼みごとをしておきながら失礼な態度だが、これにも長年の付き合いで慣れたもの。アマリーは、「ハア……」とわざとらしいため息を零こぼして書類を受け取った。

アマリーが今いるのは、通称『ヒューイの研究所』。この建物の主であるヒューイ・エストランザは、レングランドの研究所で薬草学の研究をする傍ら、学院で教鞭きょうべんも執とっている。

そんな彼にアマリーは、十四の頃から教えを乞こうており、その一方で、研究の手伝いもしていた。最初は雑用を手伝うだけだったが、現在では助手兼秘書と名乗ってもよいと、アマリーは自負していた。

もつとも今のようなお遣いを頼まれると、やはり雑用係にすぎないのかと、落ち込んでしまうのだが。

「仕方ないですね」

「ああ、悪いね。頼んだよ」

ヒューイはアマリーに一瞬だけ笑顔を見せると、それでもう用件は終わったとばかりに、再び書類へと意識を向けた。

(ヒューイ先生、いつもこんな感じの対応をしているけど、他の先生や研究員と円満なコミュニケーションが取れているのかしら……いいえ、ここに一人で籠っているところを見ると取れていないんじゃないかな)

アマリーは半ば呆れながら肩を竦めると、ちらりとヒューイを見てから部屋を出た。

ドアを閉めるまでの短い間、こっそりと彼を窺っていたものの、ヒューイはアマリーを気にした様子もない。彼女は小さく息を吐くと、玄関へと歩きだした。

ヒューイの研究所は、学院の敷地内の森にある、こぢんまりとした一軒家だ。周囲は木々に囲まれており、明るいうちはいいが、夜に女生徒が一人で歩くにはいささか勇気がいる。

(もうすぐ暗くなるのに、送ってくれるどころか用事を頼むなんて……ほんとに先生って、自分の研究以外のことには気が回らないわよね)

ため息を零し、アマリーは地面を蹴るようにして力強く歩き出す。

アマリーの生活拠点であるレンジランド学院の女子寮は、ここからだ学院の校舎や研究施設がある本棟を通らないと辿り着けない。

だからこそヒューイは気軽に用事を頼んだのだろうか、そこに、「女の子の一人歩きは危険だ」という考えは欠片もない。

(わたしってば、お人よしかも……)

アマリーはそう自嘲すると、後ろを振り返って木々に隠れた一軒家に目をやった。そして大きく頭を振ると、踵を返して本棟へと急いだのだった。

十

ヒューイに頼まれた用事を済ませ、アマリーが自室へと帰ると、エレイナが心配そうな顔で待っていた。

「遅くなるようでしたら、ご連絡下さい。すぐに迎えに行きますから」

「ごめんね、エレイナ」

エレイナに謝りながら、アマリーは着替えもそこそこに、温かいお茶が用意されたテーブルにく。コクリとひと口紅茶を飲むと、彼女の顔は自然と綻んだ。

秋も深まった今は、日が落ちると同時に気温が一気に下がっていく。温かい飲み物は必須だ。

「アマリー様、先程も申しましたが、最近日は落ちるのも早くなって参りました。あまり寄り道は感心しませんわ。遅くなるのなら、必ずご連絡を」

丸テーブルを挟んで向かい側に座っていたエレイナは、アマリーが落ち着いたのを見て、改めて告げる。

「う……だから悪かったわって。本棟の研究所に寄っていたら、遅くなってしまったのよ」

「本棟ですか？ 今日ではエストランザ様のところに行っていたのでは？」

エレイナは、アマリーの返事が予想外だったのか、不思議そうに聞き返す。

「行ったわよ。そしたらヒューイ先生に、事務室に書類を持っていってくれと頼まれたの」

「なるほど……」

うなづくエレイナの声音に、アマリーはどこことなく自分に対する憐みを感じ取り、頬を膨らませた。

「……エレイナ、言いたいことがあるなら、はっきり言っていいわよ？」

「いえ。ただ、エストランザ様は相変わらずだと思ひまして」

エレイナが苦笑していると、アマリーは大きなため息をついた。

本来、アマリー至上主義のエレイナならば、アマリーが遣いっぱしりのような扱いを受けたと知った途端、烈火の如く怒り狂い、猛抗議しただろう。

だが、ことヒューイに関しては、内心はどうあれ静かに見守ってくれているのだ。

もちろん当初は良い顔をしなかったエレイナだが、当のアマリーが口出しされることを望まなかったことと、ヒューイのあまりの朴念仁ぶりを聞くうちに、怒りよりもその行動を面白がるようになっていた。

「そうなのよね。わたしが傍にいても、仕事か実験しか目に入っていないんだもの」

「それは……」

「今日も深刻そうに名前を呼ばれたと思ったら、書類を差し出して研究所の事務室まで持っていっ

てくれないか、ですって！ 何を言われるのかとドキドキしてたのが本当に馬鹿らしいわ」

「アマリー様をメッセンジャー扱いとは、ある意味大物と言えるのでしょうか」

「ちよつとエレイナ！ 変なところで感心しないでちようだいよ！」

「あ、いえ……すみません」

あからさまにしゅんとするエレイナに、アマリーは言い過ぎたと思ひ慌てて取り繕う。

「ああ、そんなに落ち込まないで。わたしが言い過ぎだったわ」

「いえ、わたしが悪いのです」

「エレイナってば、本当に気にしなくていいから！ というか、元凶は、女の子への気遣いが足りないヒューイ先生よね」

疲れたようにアマリーが言うと、エレイナは我が意を得たりとばかりにパツと表情を明るくした。

「そうですね。すべてはエストランザ様が悪いのです！ そもそもあの方は名門エストランザ伯爵家の当主でありながら、レングランドで研究に没頭し、その傍ら非常勤講師を務めているという変わった方ですもの。おかしな振る舞いも当然のことですよね！」

（……エレイナ、それは単に変人って言い切っちゃってるだけよ）

アマリーは顔を引き攣らせながら、内心で突っ込む。

エレイナの言う通り、ヒューイはエストランザ伯爵という肩書きを持つ、正真正銘の貴族だ。

本来、伯爵といえど政に参加していなくとも、領地や領民の管理運営などで日々忙しくしている。しかし、ヒューイは違った。

隠居した彼の両親をはじめ、優秀な家人のサポートのおかげで、領地に関しては滞りなく管理出来ているからだ。

さらに、ヒューイは薬草学の研究でいくつもの重要な発見をし、国からも研究者として認められている。それゆえ、道楽と言われることもなく、好きなだけ研究に打ち込むことが出来ていた。背景だけ見れば優秀な人物なのだが、その実、研究することだけが生きがいという、いわば研究馬鹿だ。そのため、対人コミュニケーションスキルは極めて低かった。日頃ヒューイと接する機会が多いアマリーは、そのことを誰よりも良くわかっている。

「アマリー様」

エレイナにやたらと真剣な表情で呼ばれ、アマリーは思わず姿勢を正して彼女を見た。

「な、何かしら？」

「何故、あの方なのですか？」

「え？」

問いかけられた意味がわからず、アマリーは目を丸くした。そんな彼女の様子にエレイナは小さくため息を零した後、爆弾を投下する。

「ですから、何故アマリー様はあの方をお慕いなさっているのですか？」

「は……ええええっ!？」

次の瞬間、アマリーは素つ頓狂な叫び声をあげた。彼女は、誰が見ても動揺しているとしか思えないほどガチャガチャと音を立て、持っていたカップをテーブルに置く。

(アマリー様がこんなに取り乱すなんて……まさか、本当にご自分の気持ちが気づかれないとお思いだったのかしら……)

エレイナは内心驚きながらも、アマリーが落ち着くのをひたすら待った。

しばらくして、ようやく落ち着きを取り戻したアマリーは、目の前のエレイナを窺うようにしながら、おずおずと口を開いた。

「い、いつから気づいていたの？」

(……本当に気づかれないかと思つてらっしゃったのですね)

これも言葉に出さずに突っ込みながら、エレイナは答える。

「なんとなくそう感じたのは、三年ほど前のことです。最初は憧れている程度なのかと思つていましたが、ここ二年ほどの様子を見て、本当にお慕いなさっているのだな、と」

自分ではまったく表に出していないと思つていた感情が、見事なまでに駄々漏れになっていたとは。アマリーは一気に脱力し、くたりとテーブルに伏せた。

(まさか、バレバレだったなんて……しかも三年前つてわたしが自覚した頃だから、ほとんど最初からじゃない!)

今、自分の顔は見たこともないくらい真っ赤になっているだろう。恥ずかしさのあまり顔を上げることができず、アマリーはそのままの姿勢でエレイナに尋ねる。

「……わたしってそんなにわかりやすかった？」

アマリーの赤くなつた耳を眺めながら、エレイナはクスリと笑つた。

「そうですね。それに、わたしはいつもアマリー様のお傍にいますから。そのくらいのことならば、すぐにわかりますよ」

「うーん、そこは親友だからって言ってほしいんだけど」

エレイナの答えが不満だったのか、アマリーは上目遣いでじとつとエレイナを睨みつける。だが逆に、エレイナは嬉しそうに微笑むだけだ。

「僭越ながら、一番大切なお友達だと思っておりますわ」

「それならいいけど」

「ええ。ですので、よろしければ教えていただきたいのですが」

「何を？」

「それはもちろん、どうしてエストランザ様のことをお慕いするようになったのか……ですわ。失礼ですが、人付き合いが得意ではなく、あまり女性受けするような方ではないですわよね。アマリー様はあの方のどこに惹かれたのです？」

好奇心に目をきらめかせ、エレイナはアマリーに迫る。アマリーは、親友の勢いに怯んで、椅子の背に張りついた。そんな彼女に、エレイナはさらに畳みかける。

「年齢だつて結構離れていらつしやいますよね。やはり、年上ならではの包容力といったものなのでしょう。でもあの方にそんなものが……？ 年上といつても、年齢はパッと見たただけだと謎ですしね。何しろ、あの髪と分厚い眼鏡のせいでお顔もよくわからないんですもの」

エレイナの言葉を聞き、アマリーは脳裏にヒューイの姿を思い描いた。

身長は高いが、猫背気味なので気が弱く見える。その秀麗な顔立ちも、普段は分厚い眼鏡と長い前髪で隠されてしまっているため、よく見なければ気づかないだろう。

髪も無造作で、決してお洒落とは言い難い。着ているものが上質でなければ、貴族であることも疑われそうな外見なのだ。

（確かにあれでは、年齢不詳よね……）

自分の想い人であるものの、その残念な有様にはアマリーも思うところがある。

エレイナは追及の手を緩めず、身を乗り出して親友に詰め寄った。

「というわけで、どうなのですか？ どういった馴れ初めなのですか？」

「な、馴れ初め……わたしたちはそんな関係じゃ——」

アマリーはますます赤くなり、わたわたと首を左右に振る。

「細かいことはよろしいじゃありませんか。それで、出会いの印象はどうだったんですか？」

もはやワクワクとした様子を隠しもしないエレイナ。普段は落ち着いていて理性的だが、彼女もやはり若い娘。恋の話は大好物のようだ。

「う……わかったわ、話す、話すから！」

アマリーは興奮気味のエレイナを手で制すると、自分の気持ちを落ち着かせるように、すっきり冷めてしまった紅茶に手を伸ばす。

それをひと口飲んでから、彼女はゆっくりと口を開いた。

「あれは、十四になったばかりの頃だったわ——」

アマリーが十四歳になったばかりの春。彼女は母ミリエルに誘われ、王都・ライデルにある大神殿を訪れた。ここで行われる奉仕活動に参加するためだ。

クレセニア王国だけではなく、フォーン大陸の各国に散らばる神殿のほとんどで、慈善事業が盛んに行われている。

王都の大神殿も多岐にわたる活動をしているが、この日の活動は、貧しさから十分な治療を受けられない病人のために、白魔法や薬師の心得のある者が行う無償診療だった。

ミリエルは、以前から時間を見つけてはこういった奉仕活動に従事している。そのため市井の間では尊敬の念を込めて『純白の魔女』と呼ばれているのだ。

「母様、この人たちは今日のために……？」

大神殿の近くで馬車を降りたアマリーは、目に映る光景に驚いていた。

神殿の入口――祈りの間へと続く階段には、大勢の人がずらりと並んでいる。彼らは皆、生活の大変さがすぐに見てとれるほど粗末な身なりだった。

「そうよ。我が国は大陸で一、二を争う豊かな国。そして陛下の善政によって他国と比べても貧困にあえぐ民は少ないわ。それでも……皆無ではないの。病に倒れても満足な治療を受けられない

人々もいるのよ」

ミリエルは静かな声で言い、言葉もなく立ち尽くす娘の背をそっと押した。それに促されてアマリーが視線を前に向けると、離れた場所で頭を下げる神官の姿があった。

「さあ、行きましょう」

母の言葉にうなずき、アマリーはぎこちない足取りで歩き出した。彼女は列に並んでいる人々を何度か振り返りながら、ミリエルの後に続く。

ミリエルが神官に声をかけると、彼女たちは正面入口ではなく、関係者が出入りする通用門へ案内された。

そこから向かったのは、貴族用の待合室だった。

室内にはいくつかの飾り気のないテーブルがゆったりとした間隔で配置され、それに合わせて長椅子や椅子が置かれていた。部屋の彩りといえば、床の深緑色のラグのみで、石を積んだ壁にも飾りは一切ない。

アマリーたちが中に入ると、世話役の女性神官の他に、身なりの良い貴婦人や、すでに一線を退いたと思われる老年の男性など、数人の男女がいた。

彼らはミリエルと同じく、奉仕活動のため集まった白魔法使いや薬師、あるいはその心得がある人間だった。

「皆様、お久しぶりですわね」

部屋に入ったミリエルがにこやかに挨拶すると、一人の老紳士が近づいてきた。

皺しわの刻きざまれた顔は柔和にやわと整ととのっており、若い頃はなかなかの美男子だっただろうと思われる。癖くせのあるふさふさとした髪は白く、長く伸びた眉毛も同じく白い。その下にある理知的な瞳は、薄い青だ。

「ミリエル、元氣じゃったか？」

「お久しぶりですわね、ドウナン先生」

老紳士をドウナンと呼んだミリエルは、軽く頭を下げる。

「ははっ、この老いぼれをまだ先生と呼んでくれるか」

「もちろんですわ。先生がいつまでたってもわたくしの先生であることは変わりありませんもの」

ミリエルの答えに、ドウナンは嬉しうなずき目を細めた。それはまるで愛娘まなむすめを見るような眼差しだ。

（誰？ 初めてお会いするわよね。「先生」ってことは母様の恩師かしら？）

心の中で首を傾げながらも、アマリーは二人のやり取りを静かに見守る。そんな彼女の心の内がわかったのか、ふいにドウナンの視線が向けられた。

「この子は、上の娘御むすめじゃな？」

「はい。先生とお会いするのは初めてですわね」

ミリエルがそう言うと、ドウナンはふむふむとうなずきながら口を開く。

「おまえさんの上の息子にも赤子の頃に一度会ったきりじゃからなあ」

顎に手を当てて考え込むドウナンに、ミリエルはにこにこ微笑みかけている。

すると、ドウナンは思い出したかのようにアマリーに向き直った。

「おお、すまん。まだ自己紹介をしておらんかったな。儂わはザカリアス・ドウナン。昔、君の母上の先生をしておつてな」

（ザカリアス・ドウナン……ザカリアス……ドウナン……つて、ええっ？）

頭の中で彼の名を何度か繰り返したアマリーは、あることに気づき、目を見開いた。

ザカリアス・ドウナン。この国の者ならば、子供でも知っている有名人だ。

十年ほど前、南方の大国ヴィントス皇国が、クレセニアに隣するハルデア公国に侵攻してきたことがあった。

当時のヴィントスの王は、自らを王より上位の存在——皇帝と称し、北上しながら侵略を重ね、領土を広げていた。

クレセニアとヴィントスの間には、いくつかの小国が存在していたが、ヴィントスの勢いは凄まじく、クレセニアもいつ自国にまで魔の手が及ぶかと警戒を強めていた。

そんな中、クレセニアの南にあるメリアル王国を陥落かんらくさせたヴィントスは、ハルデア公国へと次の標的を定める。

ハルデアもメリアルと同じ道を辿たどると思われたが、それを見越して同盟関係にあるクレセニアから魔法師団が派遣されたため、難を逃のがれたのだった。

他の同盟国の援軍が駆けつけるまで、見事にハルデア国境の砦とりでを守り切ったクレセニアの魔法使いたちは、生きた英雄として称賛された。

その魔法師団で団長を務めていたのが、ドウナンその人だった。

彼はその戦の後、一線を退いて後進の育成に励んでいたが、最近では国王から与えられた領地で悠々自適な生活を送っていた。

だが、引退後も王都を訪れた際は、進んでこういった奉仕活動に参加している。
(ど、どうしよう！ そんなすごい人が目の前にいるなんて！)

英雄の一人を前に、内心大慌てのアマリーだったが、きちんと挨拶をしなければと心を落ち着かせて口を開く。

「あのっ、申し遅れました。わたしはアマリーシエ・フラウ・リヒトルーチェと申します」

アマリーの緊張気味な自己紹介に、ドウナンはうんうんと満面の笑みでうなづく。

「これは丁寧な挨拶ありがとう。いやいや、さすがミリエルの子だけあって、利発で美しい娘御じゃな」

ドウナンの褒め言葉に、アマリーは恥ずかしくなって目を伏せた。

そのうち室内にいた他の者たちも集まり、声をかけてくる。彼らの自己紹介を聞いたアマリーは、驚きながらも丁寧に挨拶を返した。

(すごい……名門貴族の奥方ばかりだし、ドウナン閣下だけじゃなく、他の人も皆、一度は名前を聞いたことのある名士ばかりだわ)

彼らのように社会的地位の高い者たちが、率先して奉仕活動をしている。その事実がアマリーには嬉しく、この国の人間であることが誇らしかった。

十

「では皆様、そろそろよろしいでしょうか？」

アマリーの緊張も解け、周囲に馴染んだ頃。世話役の神官が時計を見て、全員に声をかけた。

続いて皆、神官の後についてぞろぞろと部屋を出る。アマリーたちは列をなして、しんと静まり返った廊下を無言で進んで行った。

やがて、かすかなざわめきが耳に届いた。それは次第に大きくなり、一同は祈りの間に続く扉の前で辿り着いた。

重々しい両開きの扉がゆっくりと開かれると同時に、アマリーの目に入ったのは、大勢の人間で埋め尽くされた広間だった。

人々は、正面の五柱の神々を象った彫像から距離を置いたところに列を作っている。

皆がアマリーたちを待ち構えていたのか、ある者はその顔に喜色を浮かべ、ある者は祈るように手を組んだ。

アマリーが一種異様な雰囲気呑まれていると、その肩をミリエルが優しく抱いた。

「わたくしはこれから治療に回るわ。貴女はわたくしだけではなく、皆の手伝いをお願い。そうね……列の誘導やお菓の用意なんかもお願いできるかしら？」

「はい」

母から明確な役割を与えられたことで、アマリーは少しだけ落ち着きを取り戻す。

彼女は、今の自分に来ることを精一杯するしかないと、列に並んだ人々の誘導や、引退した薬師の指示のもと薬を手渡したりと動き始めた。

そのうち余裕が出てくると、特に具合の悪そうな者を先に診てくれるよう神官に訴えるなど、己の判断で動けるようになっていた。

はたから見れば、アマリーは十分役に立っているのだが、彼女としては、治療魔法も中途半端にしか使えず、薬や医療の知識があるわけでもない自分が役立たずに思えて仕方なかった。

（わたし程度の魔力では、ほんの数人の、しかも簡単な傷を癒すだけで、いっぱいいっぱい。こんな時は、魔力をたくさん持っているユアンやルーナが羨ましいわ）

アマリーは心の中で自嘲する。

自分には兄のように何でもこなせる才覚はないし、弟や妹のように人より抜きん出た魔力もない。それなりに勉強はできたが、ただそれだけだ。名のある貴族の家に生まれたとはいえ、飛び抜けた能力もなく、誰かの力になれるわけでもない人間——それがアマリーの自己評価だった。

魔法王国と呼ばれるクレセニアにおいて、魔法の才の有無は特に劣等感を煽る。

だが、アマリーに魔法の才がないわけではない。一般的な魔法使いになるには十分な魔力があり、それを使う技術もある。

今はまだ十代半ばの少女で未熟なのは当然のこと。劣等感を抱く必要はないのだが、いかんせん彼女の家族が規格外すぎた。

それゆえ、アマリーの魔力に対する基準が無意識のうちに上がってしまったのだ。

（ユアンやルーナなら、もつとここにいる皆の役に立てたのかしら……）

アマリーは内心でそうつぶやく。ただそれは、自分では病人を助けることが出来ない事実への歯がゆさのせいで、決して弟妹への妬みではなかった。

だからこそ、人の役に立てないことを苦にしようのかもしれない。

もともとアマリーは、妬みや嫉みといった昏い感情にとらわれない、前向きな性格をしている。それが彼女の長所であり、その明るさに家族全員が照らされているのだ。

「アマリー嬢、すまんがミンティはわかるかね？」

ふいに声をかけられ、アマリーは物思いから脱して振り向いた。

呼んだのは、長い間、王都で薬師をしていた老紳士。王宮にも出入りし、その功績から准男爵の位まで授けられた人物だ。

「ミンティですか……？」

尋ねられたものの、それが何を指す言葉かさえアマリーにはわからない。

「ああ、すまんな」

彼女の戸惑った様子に気づくと、老紳士は気にするなとばかりに微笑んだ。そして椅子から立ち上がり、近くのテーブルに広げられていた薬——それらは乾燥させた薬草をすり潰した粉や、新鮮な実などだ——の中から一つを手にする。

「ミンティはこれじゃよ。ほら、こうするとスツと爽やかな、良い香りがするじゃろう？ これは

消化不良の解消や鎮痛などの効果があるんじゃない」

乾燥させて刻んだミンティの葉を指で揉むと、老紳士が言うように清涼感溢れる香りがした。

「良い香りですね」

「他にも、お茶にして飲んだり、小さな袋に詰めて枕元に置いておいたりすると、よく眠れるという効果もあるんじゃないよ」

老紳士はアマリーに説明しつつも、目の前の患者にテキパキと処置を施していく。

今日参加している奉仕活動の面々の中で、この老紳士だけは魔法ではなく、薬で治療を行っている。アマリーの目には、それが新鮮に映った。

魔法はすぐに病気や怪我を治すことができるが、薬は効くまでに時間がかかるし、使い方を誤れば毒になることもある。

そのため、治療魔法は重宝されるのだが、そういった魔法を扱える人間は少ない。

医者や薬師も誰もがなれるわけではないが、生まれつき持っている魔力や魔法の才能とは違い、その技能は努力次第で誰でも身につけることができる。手に入らない天賦の才を欲しがるより、よっぽど現実的だ。

（魔法使いじゃなくて、薬師……。薬師になら、努力すればなれるかもしれない。それならわたしでもきつと、たくさんの人の役に立てるわ）

その希望が、アマリーを一気に奮い立たせる。母親のように多くの人を助けられる人間になりたい——そのための道が、彼女の目の前に開いた気がした。

（わたし、薬について学んでみたい！そして色んな人を助けられるようになりたい！）

それは、アマリーの夢が見つかった瞬間だった。

神殿から帰る馬車の中、アマリーはミリエルへと告げた。

「母様、わたしやりたいことが出来たの」

「まあ、それは何かしら？」

微笑みながら先を促すミリエルに、アマリーはひとつうなずいて話し出す。

「今日お手伝いをして思ったの。わたし、これからどれだけ魔法を勉強したとしても、ユアンやルーナには遠く及ばないわ」

自嘲するようなアマリーの言葉を、ミリエルは否定しようと口を開きかけた。しかしそれを、アマリーは笑顔で制す。

「これは本当のことだからいいの。それに、あの子たちが規格外なだけであって、わたしだってもっと頑張れば、それなりに魔法使いとしてもやっていけるってことはわかってる」

「アマリー……」

「でもね、少しだけあの子たちが羨ましいなって気持ちもあったの。だって、魔法がたくさん使えればドウナン様のように、国を守ることが出来るし、母様のように人々を助けることも出来る。そうやって何かの役に立てることが羨ましかったの」

アマリーは、何も言わずに耳を傾けてくれる母の手を握りしめた。

「でもね、今日気づいたの。魔法使いだけじゃなくて、薬師くすりしや医師だって、とても大事で必要な職業なんだって」

「そうね。良い薬師や医師は、時に魔法以上の奇跡を起こすわ」

「そうなの！ だからね、わたし、薬について学んでみたい。それで薬師に……ううん、薬師でなくてもいいの。薬の知識を学んで、それを生かせるようになりたい」

アマリーの決意に、ミリエルは目を見開くと、次いでにつこりと微笑んだ。

「自分で決めたなら、ちゃんと頑張るのよ？」

「はい！」

元気に返事をするアマリーに、ミリエルはわざとらしく厳しい表情を浮かべた。

「それから、魔法もちゃんと学びなさい。魔法だけではないわ、他の勉強もよ。色んなことを学ぶこと。それはきつと貴女の力になるから」

「ええ、わかったわ。母様、わたし頑張る！」

目を輝かせて将来の夢を語る娘に、ミリエルは満足そうにうなずいたのだった。

十

休日が終わわり、学院に戻ったアマリーは、さっそく薬師になるためにはどうすればいいかを調べることにした。

その結果わかったのは、薬師の多くは先人に師事することによって、一人前になれるということだった。

だが、学院に通っているアマリーが弟子入りなど出来るはずもない。薬師の道は閉ざされてしまったかに思えたが、薬草学の教師に相談することによって別の道が開けた。

魔法使いだけでなく、技師や研究者など様々な分野の人材を育成しているレングランド学院には、もちろん薬草学の講座もある。そこで学べば、薬師に師事するのとなら変わらない知識を得られると、教師は太鼓判を捺おさしてくれたのだ。

しかし、受講したくとも今は前期日程の半ば。途中からの参加は原則認められていないため、後期授業の受講申し込みが出来るまで待つしかない。

だが学ぶ意欲に満ち溢れている彼女にとっては、それまでの数ヶ月間を待つのもさぞかし辛い。そこでアマリーがもう一度件の教師に相談したところ、『自分は無理だが、うってつけの人物がいる』と、ある非常勤講師を紹介してもらえることになったのだ。

これは『学びたい者に、最善の環境を』というレングランド学院の基本方針によるもの。おかげでアマリーは、少しも待つことなく薬師の勉強を始められることになった。

「うーん、ここでいいのよね？」

入学してから一度も足を踏み入れたことのない区域を歩きながら、アマリーは独りごちた。

(この辺りは初めて来たけど、本当に人気がないわね。まあ、学院の敷地内で危険な目に遭うよう

なことはないと思うけど……)

レングラウンド学院は、現国王が住む白焰宮が建てられる前まで王宮があった場所だ。それだけに曰くありげな建物や立入禁止区域が多く存在するのだが、王宮当時の強固な防犯設備に加え、魔法や最新の魔道具などによってきちんと守られている。

学院の出入りも厳しくチェックされているため、不審者が入り込むようなことはない。もちろん、生徒や教員、研究所の職員も含めて問題を起す者はいないので、学院内の治安は良かった。

ただ、アマリーが現在歩いている場所は校舎の裏手で薄暗く、周囲には樹齢百年以上の木々が鬱蒼と生えているため、なんとなく不気味な雰囲気醸し出していた。そのためか、昼間でも人氣はない。

そんな薄暗い道を歩いてしばらくすると、アマリーの視界が急に開けた。彼女は意外なものを目の当たりにし、思わず足を止める。

林の中にぼつかり開いた空間の中央には、平屋の建物。その横には倍ほどの高さの倉庫が建っている。どちらも石を積み上げた壁に、時間を経て黒ずんだと思われる木の窓枠。屋根もところどころ汚れており、くすんだ赤褐色をしていた。

建物の周囲は芝生が広がっているが、手入れがほとんどされていないのか、ところどころに雑草が交ざっている。よく見れば、背丈の高い草の向こうに、菜園らしきものが埋れていた。

「なんでこんなところに一軒家が……?」

レングラウンド学院の敷地内に、一見、民家のような建物があるのだ。アマリーが驚くのも無理はない。「と、とにかく入ってみなくっちゃ」道を間違えてしまったのだろうか、という内心の動揺を抑え込み、アマリーは平屋の玄関ポーチへ向かう。

表面がささくれ立った年代ものの木製のドアの中央には、周りどまったく調和の取れていない、厳かな驚を象った青銅のドアノッカーがある。

彼女は輪の部分を手にとると、勢いよくそれを叩きつけた。

周囲が静かなせいか、思った以上にノッカーの音が響く。しかし、しばらく待ってみても声どころか、物音すらしなかった。

「……留守?」

講師を紹介してくれた教師には、この時間に訪れるようにと言われている。

(もう一回だけ試してみよう)

そう思い、アマリーはドアノッカーを今度は先程より強く叩いた。次の瞬間、中からガタンツという大きな音が聞こえてきた。

(何!?)

アマリーが驚いていると、慌しい足音が玄関へと近づいてくる。思わず彼女が一步、二歩と後退ると、内側からドアが開いた。

「何か用ですか?」

不機嫌さをまったく隠すことのないぶつきらぼうな声が、アマリーの頭上から降ってくる。扉から現れたのは、ぼさぼさの亜麻色の髪を持つ男だった。瞳の色も判別しにくいほど分厚い眼鏡。背はかなり高いようだが、猫背気味なのでそこまで威圧感を感じない。

黒のジャケットやズボン、白いシャツは仕立ての良いもののだが、上に羽織った白衣が汚れているため、すべてが台無しになっている。

「あ、あの……ヒューイ・エストランザ先生ですか？」

アマリーはおそるおそる彼を見上げて声をかけた。すると男は、不機嫌な表情から一転、戸惑った様子で彼女を見る。

「そうだけど……君は？」

「わたし、アマリーシェ・リヒトルルーチェと申します。タウンゼント先生から連絡があったかと思うのですが」

「タウンゼント……？」

ヒューイは、アマリーの言葉にいちいち驚いた表情を見せる。彼女はそれを不思議に思いながらも、念のため自分がここに来た経緯を説明することにした。

「トラヴィス・タウンゼント先生です。わたしが薬草学について学びたいと相談したところ、貴方を紹介していただけるとおっしゃったので、ここに来ました」

「ああ！ あれか！」

ヒューイは思い出したように声をあげると、自分の頭をガシガシと乱暴に掻き毟る。

「あの……」

「すまない。聞いてはいたが、すっかり忘れていたんだよ。まあ、とりあえず入って」

アマリーはヒューイに促されるまま、家の中に足を踏み入れた。

玄関を開けてすぐには、木製のベンチと観葉植物が置かれている。そこから奥に向かって真っ直ぐに廊下が続いていた。

木目そのままの壁には、青銅製のランプが取り付けられており、素朴な佇まいを演出している。

その左右に二つずつ、そして奥の突き当たりにつつドアがあった。

「こっちへ来て」

「は？」

ヒューイは突き当たりの手前にある右側のドアを開け、アマリーを振り返る。先に入れということなのだろうと、アマリーはうなずいて室内へ入った。

どうやらそこは書斎らしい。壁際に背の高い本棚が二つ並び、その近くには大きな執務机が置かれている。

ドアの近くには来客用のソファではなく、一般家庭にありそうな四角いテーブルと四脚の椅子が置かれていた。

「そこに座って」

アマリーは、示されたテーブルの椅子に腰を下ろす。それを見てヒューイも向かい側の椅子に座った。

「君の希望は、とりあえず後期の授業が始まるまでの間、放課後を利用して薬草学を学びたいという事でよかったですか？」

「はい。ご迷惑をおかけすると思いますが、わたしが出来ることはなんでもしますから！」

席を立たんばかりに意気込むアマリーを制し、ヒューイは淡々と告げる。

「うん。薬草学について教えるのは構わない。ただ、それと引き換えといっってはなんだけど、君に僕の手伝いをしてもらいたいと思ってるんだ」

「手伝いですか？」

アマリーが聞き返すと、ヒューイは窓際の執務机を指差した。

机の上には大雑把にまとめられた紙の束が、いくつも山のように積み重ねられている。

「見ての通り、僕は整理整頓というやつがとても苦手だね。ここは机の上だけで済んでいるけど、研究室はかなりまずい状況になっている」

「はあ……」

「君にはその整理……というか部屋の掃除も含め、多くの雑用を言いつけることになる。貴族の令嬢がやるような仕事じゃないけど、それでも大丈夫？」

リヒトルーチェ公爵家令嬢というのをわかった上で、雑用を言い付ける——アマリーは彼が言外にそう宣言しているのだと理解した。

(つまり、それが嫌ならこの話もな什ってことね)

ヒューイの意図を納得した上で、アマリーははっきりと彼に告げた。

「大丈夫です。寮では自分のことは自分でしているので、慣れていきます。問題ありません」

「そっか。なら、いつここに来てもらうかを決めよう。そうだな……週三回。曜日は、君が都合のいい日を決めてくれて構わない。時間は放課後になってからだね」

「大丈夫です。一日おきに通うのもいいですか？」

「うん、問題ないよ。それから肝心の勉強についてだけど、君は何か希望があるかい？」

「希望ですか？」

「そう。基礎の基礎から全部教えてほしいとか、まず自分で調べることから始めて、わからないところを中心に教えてほしいとか。……どうしたい？」

ヒューイの問いかけに、アマリーは反射的に答えていた。

「わたしは、何から学べばいいのかわからないくらいの初心者です。けれど知識を与えられるだけではなく、自分で調べて身に付けることが大事だとも思っています。だから先生には、勉強の方針に対するアドバイスをしてもらうことと、わたしが自力で学んだ知識が間違っていないか、足りないところはないかを確認していただきたいです」

「なるほど。……うん、向学心もあるし、かといって自分を過大評価しているわけでもない。生徒としてはなかなか理想的だと思うよ」

「そ、そうですか？」

「うん、僕としてはありがたい」

ヒューイはそう言って、ニコリと微笑んだ。

分厚い眼鏡の奥で小さく見えていた瞳が細められる。それは無邪気な少年のような笑顔で親しみやすく、密かに緊張していたアマリーを和ませた。

「じゃあそうだな……今日から始めてもいいけど、どうする？」

「はい！是非お願いします」

「本当にやる気なんだね」

面白がるようなヒューイの言葉に、はしたなかったとアマリーは赤くなって俯く。そんな彼女の頭に、ポンッと温かな手が乗せられた。

「さっきも言ったけど、向学心があるのは良いことだよ」

「は、はい」

子供のように頭を撫でられ、アマリーはまた恥ずかしくなって目を伏せる。

自分より下の弟妹がいるため、頭を撫でることは多くても、撫でられることはあまりなかったのだ。ヒューイの行動は、アマリーにくすぐったいような、でも嬉しいような、複雑な気持ちと呼び起こした。

「僕の指導は厳しいよ」

ヒューイはアマリーの頭に手を置いたまま身を屈め、その赤く染まる顔を覗き込む。彼女は分厚い眼鏡越しに見える若草色の瞳にドキリとしながらも、大きくうなずいた。

それを確認したヒューイは、アマリーの頭の上から手を離す。

彼の手の感触がなくなると、それを残念に思う自分がいることに、彼女は心の中で首を傾げた。

「じゃあ、とりあえず今日は君がどんな薬草をどれだけ知っているか、ここに全部書き出してもらおうか。出来れば特徴や効能なども書いてみて。絵に描いてもいいから」

「わかりました」

「僕はその間、書類仕事をしているから、終わったら声をかけてくれるかな。君の書き出したものをもとに、講義をしよう」

「はい！」

アマリーは元気に返事をする、早速とばかりに差し出された紙に目を落とす。

あの奉仕活動の日から、図書館などで自分なりに調べて勉強していたのだ。その努力を披露できる意味でも手は抜けない。

（えっと、ミンティにマロウ、ステリア、カモミール、ジルド……）

アマリーは心の中で知っている薬草の名を挙げながら、用紙に記入していく。それらの効能や特徴も、余白に覚えていた限り書いた。

一方、ヒューイは宣言した通り、アマリーの様子を一切窺うことなく机に向かって仕事をしていく。

（何も口出ししないのね……）

指示は出されているものの、あまりの放置状態に、アマリーは困惑しながらヒューイに目を向けた。しかしその視線にも気づかないのか、彼が顔を上げる様子はない。それが何だか見捨てられたように感じた次の瞬間、そんな風に考えている自分にも驚く。

(先生のことを気にしている場合じゃないでしょ！)

気を取り直すようにふるふると首を振ると、アマリーは再度与えられた課題に取り組みことにした。

しばらく沈黙が続く。部屋に響くのは、羽ペンが紙の上を滑る音と、紙を捲る音くらいだ。知っている薬草をすべて記入し終えると、アマリーは顔を上げてヒューイに声をかけた。

「あの……出来ました」

「ああ、了解」

ヒューイはうなずくと、すぐさま席を立ってアマリーの向かいの椅子に腰掛ける。そして、彼女が書き込んだ用紙をじっと見つめた。

「——君は薬草について学んだことがなかったんだよね」

「はい。校外学習などで調べたことはありませんが、それくらいです」

「そっか。なら、この効能や外観の特徴なんかは自分で調べたのかな？」

「はい！ 図書館で薬草図鑑や資料集を見て調べました」

「それは立派なことだね」

お世辞や嫌味ではなく、心から感嘆しているヒューイの言葉。アマリーは自分の努力を評価してもらえたのが嬉しくて頬を緩めた。

課題に一通り目を通したヒューイは、ふいに席を立つと、本棚から赤みがかった革装丁の本を取り出した。それをアマリーに差し出して言う。

「これは、薬草茶の本だね。まずはこの辺りから覚えていくといい。実際に薬草を採ってきて、お茶にして飲んでみるのもいいしね」

アマリーはヒューイから本を受け取ると、早速ページを開いてみた。

それは気軽に楽しめるハーブティーを扱った本で、彼女も知っているようなものをはじめ、様々なお茶が効能と共に記してあった。

「薬は、量や配合次第では毒になることもあるんだ。材料となる草花も、部位によって毒にも薬にもなったりするからね。だからこそ、正しい使い方をきちんと学ぶ必要がある」

彼の説明に、アマリーはコクコクとうなずく。

確かに花や葉は毒でありながら、根だけは薬になるといった薬草が存在する。それを図鑑などで知ったアマリーは、薬草というものの奥深さを改めて感じていた。

「だけど、薬草茶にはそこまで大きな問題になる薬草を使わないから、薬草を学ぶにはちょうどいい。花屋にあるものを加工してみるのもいいし、ハーブティーを扱う店なんかでも手に入るんじゃないかな。自分でも試してみたら、効能だけではなく、味や香りなんかの特徴もわかるから。それを後で文章にまとめてみるのも勉強になる」

「はい」

ひたすら薬草の知識を詰め込み、それを加工する方法を実践する——そんな授業をぼんやりと考えていたアマリーだったが、意外にも楽しみながら学ぶ方法を教えてもらい、良い意味で裏切られた。

(最初はすぐ不機嫌そうだったし、身なりもだらしない感じで、大丈夫かしらなんて思ったけど……なんだか放課後が楽しみになりそう！)

若干失礼な感想を持ちながら、アマリーの顔はワクワクとした気持ちのまま綻ぶのだった。

十

「先生、これは二十グラムでいいんですよね？」

「そうそう。あとこちらの煮詰めたものと混ぜて、しばらく置いておけば完成だ」

アマリーが問いかけると、ヒューイは自分の作業をしつつ、次の指示を出した。それを聞いた彼女は、迷うことなく言われた通りの作業をこなす。

アマリーが放課後にヒューイのところに通いだしてから、三ヶ月が経った。

最近では講義の後に、彼の研究作業を手伝うことが増えた。

ちなみに、彼女が『ヒューイの研究所』と呼んでいるこの家は、数代前の学院長が趣味で建てた宿舎らしい。

当時のレングラッド学院長は、学院で用意された王都にある宿舎や、学院の寮が好みに合わず、自身の特権によって、この場所に農家風の家を建設したという。

その学院長が引退してからは、希望する教師が使用していた。しかし設備が古く不便なことから不評で、しばらくの間、空き家となっていたのだ。

それをヒューイが、自分でリフォームすることを条件に借り受け、今に至る。

「よし、完成」

翠色の液体が入った瓶を机の上に置き、アマリーは満足げに腰に両手を当てた。ヒューイに報告しようと振り向くと、彼は何やら真剣な顔で作業をしている。アマリーはそれを好奇心を隠せぬ様子で見ながら声をかけた。

「ヒューイ先生、それは？」

「魔物避けの薬だよ。魔生物学の研究所から頼まれたんだ。近々行っ魔物の駆除に必要なになるんだぞうだ」

「魔物避け、ですか」

「ああ。すべての魔物に有効というわけではないが、獣から変化したと思われる魔物にはよく効くんだ。獣避けの薬を強化する形で作っているから、そのせいかもしれないが」

アマリーはヒューイの説明に熱心に相槌を打ちながら、彼が持つ赤紫の瓶を眺めた。

(薬草学って本当に奥深いわ。人を癒すだけじゃなくて、人の生活をより良くするための薬というものもあるんだもの)

学べば学ぶほど、興味が尽きない。

もともと勉強がさほど好きではないアマリーだ、単調な授業であれば、すぐに飽きていただろう。だからこそ自主性を重んじ、かといって突き放すでもなく適切な指導をしてくれるヒューイは、アマリーにとって理想的な教師といえた。もつとも――



「うわあっ！」

ガシャンツ、というガラスの割れる音で我に返ったアマリーは、目の前の光景に深々とため息をついた。

何をどうやったのか。ヒューイの足元にはガラスの欠片かけらや、粉にした薬草などが、あちこちに散らばっている。彼は青ざめた顔で、散乱したガラスから一步身を引く。頭上に突き出した手に魔物避けの薬瓶びんを握ったままだ。

「……先生」

「う……」

「何をやってるんですか」

呆れたようにつぶやいたアマリーに、ヒューイは言葉を詰まらせる。

「いや、机の上に色々乗っていたから、どげようと……」

「それで何故、この惨状さんじょうに？」

「……何故だろうね」

アマリーが半目でヒューイを見ると、彼は乾いた笑みを浮かべながら頬を掻いた。

「はあ……仕方ありませんね。片付けますから、どいて下さい。あ、その瓶は渡してもらっていますか。先生が持つてるとそれまで壊しそう」

「う……、すみません」

ヒューイは情けない顔で謝ると、そそくさとその場を離れ、部屋の隅に置かれていた椅子に腰掛

ける。その姿は、まるで叱られた子供のようだ。

(もう、本当に研究以外はどこか抜けてるんだから……)

心の中で文句を言いながら、アマリーはテキパキと割れたガラスを片付け、その周辺と、ついでに机の上を掃除した。

大貴族の令嬢とは思えない手際の良さで仕事を終わると、彼女は部屋の隅で小さくなっているヒューイを見る。

「はい、終わりましたよ」

「ありがとう、助かったよ」

ホッとしたような笑顔で、ヒューイが礼を言う。アマリーはそれに首だけ振って応えると、机上の魔物避けの薬が入った瓶びんに蓋ふたをした。

「これは無事でよかったですね」

「そうだな。結構貴重な材料が入ってるから、無駄にしてたら大変だったよ。助かった」

「どうか、先生が使う道具には、すべて〈強化〉の魔法でもかけておくべきですよね」

「そ、そこまではしなくていいと思うが」

ヒューイが否定すると、アマリーはわざとらしく肩を竦すくめる。

「自分が破壊魔だつていう自覚がないんですか？　ここ三ヶ月で、どれだけの器材や瓶が壊れたとか……おかげでわたし、掃除がとんでも得意になりましたよ」

アマリーはそう言いながら、その時の大変さを思い出すように遠い目をした。

あれは、放課後、ヒューイの研究所に通うことになってからすぐのこと。

まず最初に彼女がしたのは、勉強ではなく各部屋の掃除だった。

初日に通された書斎は、ヒューイの書類仕専用の部屋だったため、机の上が雑然ざつぜんとしている程度で済んでいた。が、他の部屋は、入った途端アマリーが硬直するほど荒果あらくれていたので。

壁や床のあちこちに、何か得体のしれないものが零こぼれて出来た染みや跡。物は散乱くずりだんし、薬筆やくでん筒や机の引き出しはどれもきちんと閉められておらず、泥棒が入った後のような有様だった。

「は、はは……」

あまりにも衝撃的な光景に、アマリーは思わず引き攣ひきつった笑い声をあげてしまったほどだ。そんな状態の彼女を見ても、ヒューイは悪びれることなく、軽い調子で笑っている。

「悪いね。忙しくて掃除に手が回らないんだ」

(忙しくて手が回らないなんて生易なまやしい状況じゃないでしょ、これ！)

アマリーは心の中で盛大に突っ込むと、おもむろに制服の袖をまくった。

「とりあえず、今日はここの掃除をしますね！　それで一日終わってしまいますが、明日も来ますので講義はその時でお願いします！」

有無を言わせぬ彼女の迫力に、逆らうのは得策ではないと思っただろう。ヒューイは「わ、わかった」と怯おびえた表情で了承した。

返事に満足すると、アマリーは気合いを入れて部屋の掃除に取り掛かる。

そして、ようやく掃除を終え、アマリーが道具を片づけるため他の部屋のドアを開けると――目の前にはさきほどの書齋と同じくらい荒れ果てた部屋。それを目の当たりにした彼女は、愕然とした。

しかも片づけたそばから、すぐにヒューイが物を壊したり散らかしたりと、さらに仕事を増やすのだ。

結局アマリーは、三日連続で通い詰め、すべての部屋の掃除を終わらせた。もちろん、その間、講義はおあずけだったのだ。

(ヒューイ先生って、研究者としても教師としても優秀な方だと思うけど、どうして生活能力だけはないのかしら……)

アマリーは苦笑するヒューイを横目に思う。

(でもこんな大きな欠点があるからこそ、こちらも気負わずにいられるのかもしれない)

最初は呆れていたアマリーだが、最近ではヒューイのこういつた抜けている部分なんだか可愛らしいとまで思えてきた。先生であり、十も年齢が上の男性なのに、だ。

(やけに長女気質を刺激されるっていうか……わたしってば、根っからの世話焼きだったのね)

自分の新たな側面を自覚したアマリーは、以後、彼の世話を焼くのがすっかり板についてしまったのだった。

十

そうして時は過ぎ――

アマリーがヒューイに教えを乞うてから、一年の歳月が流れた。

「アマリーさん、悪いがこれを選別するのを手伝ってほしい」

ヒューイが出先から戻るなり、いつものように研究室で手伝いをしているアマリーに言った。

彼女がヒューイの指す方に目を向けると、買い込んできたのか、それともどこかで採取してきたのか、たくさんの種類の草花が入った大きな籠かごが置かれていた。

「どうしたんですか、これ」

「先週行った校外学習の成果だよ」

「校外学習の？」

目を丸くするアマリーに微笑み、ヒューイは籠の中から中身を取り出す。

校外学習はその名の通り、学院の外で行われる授業だ。薬草を採取したり、棲息する動物を観察したりと場所によって課題は異なる。今年は薬草採取がテーマだったため、アマリーもはりきって参加したのだった。

「教師が確認して毒草や取り扱いが危険なものを除いたら、教材や研究所で使用するんだ」

「なるほど、これは確認後に寄付されたものなんですね……そういえば、校外学習で集めた薬草が

どうなるかだなんて気にしたことなかったです」

「まあ、そうだろうね。大体はよくある薬草だから、教材などの消耗品として使われることが多いよ。ただし、稀まれに希少な薬草も手に入るから、校外学習といえど、なかなか侮あなごれないんだ」

「へえ」と感心しながら、アマリーはヒューイに近づいて籠の横にしゃがみこむ。そして、薬草の仕分けを手伝いだした。

迷うことなく、しかも正確に仕分けていくアマリーを見て、ヒューイは口元を緩める。

アマリーが後期の薬草学の講座を受けられるまで——その期間限定で決められた放課後の勉強会は、結局のところ一年近く経ってもまだ続けられていた。

それは、勉強会をやめたくないため、終了の話題を出さないでいるアマリーのせいかもしれない。しかも最近では、一日おきという取り決めもなくなり、アマリーは時間の許す限り研究室に通うようになっていた。

それだけ一緒に過ごしていれば、それなりに打ち解けてくるというもの。

半年近くの間ヒューイから「リヒトルーチェ嬢」と呼ばれていたアマリーだが、「アマリーシェ嬢」を経て、最近ようやく「アマリーさん」へと進化した。

そして彼女は、いつの間にかヒューイの手伝いどころか、助手と言えるほどの力を身に付けていた。

彼から特に褒められたことはないが、なかなか役に立てていると思うのは、決してアマリーの自惚ぼれではないはずだ。もともと、お掃除要員なのは相変わらずだが。

「アマリーさんが手伝ってくれるようになって、仕事がやりやすくなったよ」

ふとした拍子にヒューイが言ってくれる言葉に、アマリーは心から嬉しくなる。

「先生の教え方が良いからですよ」

「そうかな？ 僕はあまり人付き合いが良い方ではないし、口下手だから、誰かに教えることに關しては、まったく自信がないんだよ」

自嘲じちやうするようなヒューイの言葉に頭を振り、アマリーは以前から不思議に思っていたことを訊きいてみた。

「——ヒューイ先生は、伯爵位をお持ちですよ？ それなのに、どうしてレングランド学院で非常勤講師をしているんですか？」

伯爵という身分がありながら、一研究員として研究に没頭するなど、普通に考えればありえない。彼女の疑問に、ヒューイはしばし躊躇ためらった後、ゆっくりと話し出した。

「幼い頃から薬草学に興味があつてね。幸いにもその才もあつたみたいで、国の役に立つ研究成果をあげることが出来たんだ。ほら、前に作った魔物避けの薬とか。あれで多少なりとも被害が減った実績もあつて、それで国から予算がもらえることになった。領地は現役を退いた父が見ているし……僕はまあ、研究すること自体が仕官していると捉とらえてもらっているから、伯爵家を継いだ今でも研究に専念出来ているんだ」

「それってすごいことですよね」

アマリーは感心したようにつぶやく。

レングランド学院で研究を続けている時点で、研究者としては十分認められているといえる。その中でも国から予算をもらえる研究者は、一流どころか超一流と言ってもいいくらいだ。

アマリーがそう賞賛すると、当の本人は天を仰いで苦笑いを浮かべる。

「さあ、どうだろうね。僕は研究が好きだからやっているだけだし。それにさっきも言ったけど、人に教えることには自信がないから、出来れば教壇めいどうだんに立ちたくないんだ。だけど、研究者としても若者の育成はしなくちゃいけないと思うからね」

「うーん、でもわたしはヒューイ先生に教えてもらえて、すごく勉強が楽しいです。だから、そんなに自身を卑下ひげすることは無いと思いますけど」

「そっか……うん、アマリーさん、ありがとう」

てらいのないアマリーの言葉に、ヒューイは一瞬面食らったようだが、すぐに満面の笑みを浮かべた。

「——ッ！」

アマリーは、見たこともないヒューイの全開の笑顔に動揺してしまい、咄嗟とつさに立ち上がろうとした。

「あっ……」

「危ない！」

急に立ち上がったせいで、バランスを崩したアマリーの身体が後ろに傾く。

(この後ろって、確か薬品がしまつてあるガラス棚よね……まずいわ、怪我しちゃうかも)

アマリーは倒れ込みながらも、暢気のんきにそんなことを考える。

すると次の瞬間、思いがけず力強い腕に抱きとめられた。

(えっ……?)

大きな手で肩と腰を支えられ、次いで全身がすっぽりとぬくもりに覆われる。

アマリーは混乱した頭で、なんとかこの状況を把握した。

(ヒューイ先生に抱きしめられている!?)

理解した途端、未だかつて経験したことがないほど激しい羞恥しゆうぢが彼女を襲う。

「あああああのも、もう、大丈夫ですから！」

アマリーは顔を真っ赤にして、彼との間に挟まれた両腕で押し、密着していた身体を離れた。そしてヒューイの顔を見上げると、ハッと顔を強張こわばらせる。

眉間に皺しわを寄せ、奥歯を噛み締めて苦悶くもんの表情を浮かべるヒューイ。いつもは彼の若葉色わかばいろの瞳を覆っている分厚い眼鏡が不自然にずれている。

彼の肩越しに見えるのは、大きなガラス棚だ。二人分の体重を乗せてぶつかつたためか、はめ込まれたガラスはほとんど砕け散ってしまっている。扉の木枠には、尖とがったガラスが残るのみだ。

「ヒューイ先生！」

アマリーは慌ててヒューイから離れる。そして、床に散らばったガラスの破片に気をつけながら、彼の後方を覗のぞき込んだ。

棚に残ったガラスの鋭い切っ先に血が付着しているのを見て、彼女は大きく息を呑む。

「先生、血が……！」

思わず声をあげたアマリーを、ヒューイは穏やかな声で宥めた。

「少し擦ったただけだと思うから、大丈夫だよ」

「でも……」

「君の方は怪我はないかい？」

ヒューイはそう言うと、心配そうにアマリーの顔を覗き込む。

アマリーの目の前には、眼鏡のレンズ越しではない、鮮やかな若葉色の瞳。彼女は、またしても顔に熱が集まるのを感じながら、ゆっくりうなずいた。

「わ、わたしは大丈夫です」

「そうか……君が無事でよかった」

ヒューイもホツとしたのだろう。アマリーの言葉を聞いて、にっこりと微笑んだ。その笑顔にアマリーは思わず目を伏せる。

（な、なんでわたし、先生を直視できないのー！）

顔に熱が集まり、心臓がドクンドクンと激しく鼓動を打つ。自分を必死に落ち着かせようと、アマリーは下を向いたまま、何度も深呼吸を繰り返した。

「本当に大丈夫かい？」

上から落ちてくる心配そうな声に、アマリーはようやく意を決して彼の顔をまっすぐ見る。

「ほ、本当に大丈夫ですよ。それより先生の方が怪我を……」

「これくらいなら、僕の治癒魔法でも治せるから気にしなくていいよ。それにしても、助けようとして被害を拡大してしまった気がするな……」

少しばかり落ち込んだ様子で告げるヒューイに、アマリーはブンブンと大きく首を横に振る。

「そんなことありません！ 先生のおかげでわたしは怪我一つなかったんですっ」

「ははっ。ありがとう。そう言ってもらえると気が楽になるよ」

「本当です。怪我がなかったのは先生のおかげです！」

必死に訴えるアマリーに、ヒューイは目を細めて彼女の頭を軽く撫でる。

「君を守れてよかったよ」

何気なくつぶやかれた言葉に深い意味はないのかもしれない。だが、アマリーには、その言葉が宝物のように胸に染みこんでいった。

十

「……そんな感じ、です」

顔を真っ赤にしてヒューイとの思い出を語り終えたアマリーは、最後はおどけた調子でそう言った。

そんな彼女に、「くっ……可愛すぎですわ、アマリー様！」などと思いつながらも、表面上は至極真面目な表情でエレイナはうなずく。